

## 街が人を育てる（シドニー市内視察）

東京表現高等学院 MIICA 副校長 野村 静夏



### 1 シドニー市内へ

2019年9月8日、ブリスベンからシドニーへ移動し2日目の朝、週末の1日を私立学校教員海外研修団はシドニー市内を視察し、有意義に過ごした。

海外研修に臨んで痛感したことだが、教育を知る上で「その国の文化を理解し、その国民の気質に触れること」は重要である。それぞれの社会のあり方により、教育は形成されるのだと改めて認識させられた。今回、シドニー市内視察についてご報告することにより、オーストラリアの教育に対する理解が一層深まることを願う。

### 2 視察概要

オーストラリアの国土は769万2,024㎢、人口は2,499万人（外務省ホームページより <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/australia/data.html>）。日本のおよそ20倍の国土を持つが、人口は日本の5分の1ほどである。その広大な国土ゆえに、同じ国の中でも驚くほどに気候が異なる。日本で言えば東京-九州間ほどの距離があるので当然ではあるが、真夏のような暑さを感じたブリスベンに対して、シドニーでは冬の入り口のような肌寒ささえおぼえた。これからいくつか写真を紹介するが、日差しが強い一方でやや寒さを感じる、早春というよりは日本における秋冬の気候であったとご想像いただきたい。

今回の視察では、シドニーにおいて主にミセスマッコリーズポイント、オペラハウス、ニューサウスウェールズ州立美術館を訪問し、ダーリングハーバーやサーキュラー・キーといった主要市街地を、車窓から見学した。

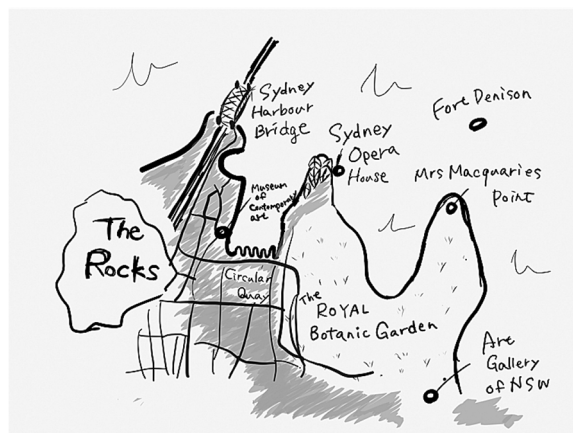
綺麗な海と豊かな緑、どこかヨーロッパな建造物が多く建ち並ぶ「ロックス地区」。世界遺産にも登録された「オペラハウス」や、世界一の幅を誇る「ハーバーブリッジ」。それらは有名な観光スポットであり、新しさや綺麗さを兼ね備えながらも、紡がれて

きた歴史を感じさせる風景であった。

## 2-1 ロックス地区

私たちが宿泊した地区でもある「ロックス地区」は、イギリスの植民地時代を思わせる建造物が多く建ち並んでいた。オーストラリアは岩盤で出来た土地であり、当時はイギリスから運ばれた多くの囚人が苦心し、手作業で岩を削り開拓したという。何らかの道具を用いて懸命に岩盤を削ったと思われる跡が、街の壁面のいたるところに残されていた。

オーストラリアは、6万年前から先住民アボリジニが在住していたと言われる。氷河期時代に東南アジアから移住してきたとされるアボリジニは、文字を持たず、絵画や口伝でその独自の文化を築き上げてきた。ところが大航海時代、1770年にイギリスの海洋探検家・クック船長がエンデバー号で東海岸ボタニー湾（現在のシドニー・オペラハウス周辺）に上陸し、イギリス領を宣言した。ニューサウスウェールズ（イギリスの新しい南のウェールズ地方 という意味）と名付けられたその土地には、植民地として人々が移住したほか、独立したアメリカに代わる流刑地として開拓され、ゴールドラッシュや羊毛産業の発展も手伝って、イギリスとの関係性が大きく変わっていく。各地に置かれた植民地に自治権が置かれるようになり、1901年には「オーストラリア連邦政府」が誕生している。開拓の歴史の始まりの地が、このロックス地区一帯なのである。



## 2-2 ミセスマッコリーズポイント

Mrs. マッコリーとは、植民地時代の初代総督夫人の名前である。彼女は、イギリスからオーストラリアに移住していたため、故郷を懐かしむあまりホームシックになってしまった。毎日港で本国イギリスの方角を眺める夫人を不憫に思い、総督が囚人に夫人用の椅子を、岩を削って作らせたという。それが今日まで残っており、その場所を「ミセスマッコリーズポイント」という。

当時、危険な航海を経てオーストラリアにたどり着き、いつ帰れるかも分からない故郷を思う気持ちは、どのようなものだったのだろうか。



ミセスマッコリーの見ていた風景

なお、ミセスマッコリーズポイントから見る海に浮かぶ「フォードデニソン（デニソン砦）」と呼ばれる場所がある。ここは1841年まで、囚人を閉じ込める場所として使用されていた。海にはサメが多く、脱出できた囚人は居なかったようだ。

第一次世界大戦、イギリスに倣って連合軍側についてオーストラリアに対して、日本は空と海から攻撃を試みた。上陸こそなかったものの、オーストラリアの本土を攻撃した唯一の国が、実は日本であるというのは、今の日豪関係からは想像し難い事実である。東海岸は潜水艇で攻め、特にダーウィンには繰り返し空爆を行ったようだ。そして当時、その日本軍に対抗する要所となったのが、このフォートデニソンに置かれた砲台であったという。

#### ◆ カウラ脱走事件

1944年8月、およそ1,000人の日本人捕虜が収容されたカウラ収容所という場所で、その事件は起こった。ちょうど第二次世界大戦も終盤を迎え、二度の世界大戦で日豪関係が最悪の時を迎えていた頃のことである。

日本は、多くオーストラリア人を捕虜にし、非道の限りを尽くしていたと言われるが、反対にオーストラリアでも多くの日本人が捕虜となっていた。ただしオーストラリアは、ジュネーブ条約に定められた捕虜処遇規定に従って、日本人捕虜を非常に丁寧に扱っていたとされる。カウラ捕虜収容所の日本人には、十分な食事と休養、さらには野球というレクリエーションまで確保されていたという。それなのにある日、歴史上最大規模の大脱走を敢行するという事件が起きた。日本人捕虜が、自ら死ぬための、と前置きがつくような、無謀な脱走を行ったのである。

日本人の「生きて虜囚の辱めを受けず、死して罪禍の汚名を残すことなかれ」という教えが、その悲しい事件の発端でもあった。『あの日、僕らの命はトイレットペーパーよりも軽かった』という映画にもなっているが、トイレットペーパーで投票し多数決を行い、多くの捕虜が脱走・失敗し、その命を落としたのだという。

現在、カウラ収容所の跡地には「日本人慰霊墓地」が置かれている。日本庭園や桜も整備され、現在では日豪友好の象徴の地ともなっているようだ。かつての惨劇では、もちろんオーストラリア人にも多数の犠牲者が出ており、日本への憎しみが先に立っても不思議ではない。ところが彼らは、日本人の中にも意に反して戦争をさせられた人がいたことを理解し、平和を夢見た過去の人々に思いを馳せ、戦争の教訓を生かして友好関係を築こうと努力している。まさに、オーストラリアの国民性を伺い知ることのできるエピソードであると言えるだろう。

### 2-3 シドニーオペラハウス

シドニーのシンボルとも言えるオペラハウス。ベネロングポイントと呼ばれる土地に建てられた、世界的に有名なホールである。遠くから見ると1つの繋がっている建

物に見えるが、近くに寄れば、いくつかの建物が連なって形成されていることがわかる。大小 6 つほどのコンサートホールがあり、チケットを持つ人、もしくは特別なツアーに参加する人のみ入場することができる。オペラハウスという名称ではあるが、オペラ以外にも演劇、オーケストラ、ミュージカル、その他、年間でなんと 1,800 公演も上演されるそうである。



オペラハウス近影



ハーバーブリッジから見たオペラハウス

第二次世界大戦以降、シドニー交響楽団を世界的な一流のオーケストラにするという目標がたてられたが、その目標の唯一の障害が「大規模なコンサートホールが存在しなかったこと」であった。これが、シドニー・オペラハウス建築の始まりである。デザインコンペティションが行われ、28 カ国 222 案が提出された。コンペティションを勝ち抜いたのは、デンマークのヨーン・ウツソン（当時 38 歳）であった。彼はシェイクスピア『ハムレット』の舞台でもあるヘルシンゲルのクロンボー城と、シドニーのベネロングポイントに共通点を見出した。それは「すべての側面から視線を浴びる」という立地である。結果として、すべての角度から一部の醜さも見えてはならない、という建築へのこだわりが、特徴的な「シェル屋根的デザイン」を生み出した。

当時ウツソンのデザインは、賞賛を浴びると同時に、彫刻と建築が混ざった「彫築」と冷笑も浴びた。サーカスのテントとも例えられたそれは、あまりにも斬新なデザインであり、幾何学的ではなく、力のバランスも非常に難しい自由造形であった。実際の建設工事にあたり、簡単なことは何ひとつなかったという。その上、近くを通る船にも配慮し、日光が反射して悪影響を及ぼさないよう、タイルには日本の陶磁器を参考にした材料が使われたクリーム色のタイルを用いるなど工夫が凝らされた。

工事中、予算の不足により「宝くじ」で建設費用を賄ったというのは有名な話である。金銭的問題のみならず政治的な方針にも翻弄されながら幾多の困難を乗り越え、オペラハウスは誕生した。

その後、2007年には、ピラミッドやタージマハル、万里の長城など数々の歴史的遺

産と並んで世界遺産リストに登録された。これは、建設に関わった人々の労苦が報われた瞬間でもある。これまでリストに追加された中で最も新しく、建築家が受賞時に存命であった唯一の文化遺産であるという。

#### 2-4 ニューサウスウェールズ州立美術館

オーストラリア国内で2番目に大きいと言われる、ニューサウスウェールズ州立美術館を訪問した。当館では、世界的に有名な画家の作から、アボリジナル・アートまで幅広く展示されていた。驚くべきことに、入館料は「無料」である。多くの家族連れや若者、海外からと思われる旅行客が訪れ、子どもたちがアートに親しむコーナーも賑わいを見せていた。館内にはアジアのフロア（日本画、浮世絵等を含む）も常設されており、日本の屏風や和室、韓国、インドのアート作品も多く展示されていた。



NSW 州立美術館外観



館内の様子

### 3 街が人を育てる ～手段と目的～（シドニー市内視察を終えて）

今回のシドニー市内視察を通して「街が人を育てる」という言葉が、ふと頭に浮かんだ。それは、教育という目先の手段を通り越して、世界のより良い未来を見据える人々と多く関わったからこそ、出てきた言葉だと考えている。今回の研修を通して、教育にかかわる「手段と目的」について、課題意識を持ち再考することができた。

シドニー市内視察で最も印象深かったのは「誰もが気軽にアートに触れられる」ことであった。今回訪問した州立美術館の他に、現代美術館やアートギャラリーなど、多くのアート施設がある。そしてその多くは「入館無料」であった。週末は多くの家族連れやカップル、若者たちが訪れ、アートを楽しんでいた。

「環境が人をつくる」とはよく言うが、「環境が人を育てる先生である」と同義だ。例えば、街にアート作品が溢れたなら、お金をかけずとも、誰もがクリエイティビティを育み、感性を高めるチャンスを掴めるだろう。例えば、大人たち同士が互いの個性を認める世の中を作れば、きっと子供たちも互いの個性を尊重するだろう。家

庭や街という環境によって、人はデザインされていく。そう思えば、人が育つ環境は学校の外にもあり、育つべきは子供だけではないのである。今回の研修を通して「教育」とは、子供や一部の人のためだけではなく、より良く生きたい全ての人に学びの場を提供することを指す、と改めて感じた。

同時に、「手段と目的」を違えないことが肝要であるとも強く感じた。例えば「人はなぜ学ぶのか」という問いがあったとする。「自分の将来のため」という一般的な答えも間違いではない。しかし、研修を終えた私ならば「学ぶ理由に疑問を感じている時点で、学びが目的に成り代わってしまっている」と答えたい。学ぶことは、手段だ。なぜなら、人である以上、その目的は「より良く生きること」だからだ。もしも「より良く生きるために試行錯誤して、気づいたら学んでいた」という環境を整えることができるなら。学びが強制・拘束であるという概念を捨て「遊びからも学ぶ」ことを推奨する勇気が持てたなら。初めて日本の教育は、現代そして未来に向けて、スタートラインに立てるのではないだろうか。学校がとても楽しいと、iPad教材で授業課題に取り組みながら話してくれたオーストラリアの女の子と接して、そう思った。

本研修の題目であるICT教育にも、同じことが言える。名ばかり追って、機械の使い方を一生懸命マスターしても意味がない。ICT教育とは、あくまでも「手段」なのである。教育とは何か、学校の目的とは何か。今こそ見直す必要がある。

オーストラリアでは、「一斉横並び」ではなく「個」を育てる環境に、すでにシフトしている。私は幸いにも、海外研修に参加することによって実際に学校や環境を見渡し、学校のあり方を考える貴重な機会をいただくことができた。研修員としては、この機会を無にすることなく、できる限り多くの人に伝えていくことが重要であると思う。そして、人を育てる、という一大プロジェクトにあたっては、学校という枠組みを飛び出してでも、社会と参画し教育という大きな試みに挑戦していきたいし、挑戦してくださる仲間をもっと増やしていきたい。

もちろん、教員とはご多分に漏れず多忙を極めるものである。だが、たまには書を捨て「街」に出て、時間が許せばぜひこの研修にもご参加いただきたい。年齢を問わず大人が実際に新世界に触れることも、その新しい風を学校へ吹き入れることも、子供たちのために必要なことだ。



シドニーの絶景に臨む研修員

参考：『アイデアからアイコンへ シドニーオペラハウス』マイケル・モイ著